

Lalitavistara 嘱累品の研究 (1)

——『十地経』との対応部分を中心として——

外 蘭 幸 一

序

Lalitavistara [以下 **Lv** と略す] の嘱累品 (nigama-parivarta) は、その内容から見て大きく二つの部分に分けることができる。第1の部分は、大自在 (maheśvara) 天子を筆頭とする浄居天子衆に対して「この法門を受持・読誦せよ」と勧めるところの付嘱の記述であって、そこには、この **Lv** なる法門に合掌し、あるいは讃歎し、書写し、読誦し、解説すること等の七種の実践及びこの法門流布の処〔したがって、合計八項目〕の各々について、それぞれ八種の功德のあることが詳細に説かれている〔これを「八功德の一段」と呼ぶことができよう〕。それに続く第2の部分は、大迦葉・阿難及び弥勒菩薩に対して「私 (仏) は汝等の手にこの無上正等覚を付嘱する (paridāmi)」と明言してなされる嘱累の記述であって、そこには、声聞供養・独覚供養・仏供養・經典宣布の福德が順次に挙げられては、後者の福德は前者のそれに対して比較にならぬほど大きいことを示すことによって、結局、經典宣布の功德が絶大なることを強調するところの詩頌 (10 偈) が記されている〔これを「10 偈の一段」と呼ぶことにしよう〕。この 10 偈が即ち **Lv** における最後の詩頌であり、その後には、聴衆の大歓喜せる旨を記すところの散文の短い終結部があるのみである。この「10 偈の一段」は、先の「八功德の一段」とは異なった方法によって、經典受持の功德を強調するところのものであり、精神的には同じ立場に立ちながら、その表現方法を異にするところのものである。

これら二つの部分は、元来それぞれ別の文章であったものを合わせて嘱累の一品としたものにちがいない。何故なら、二つの部分はそれぞれが付嘱の形式をとっており、ひとつだけでも立派に嘱累の機能を果たし得るし、何よりも竺法護 (A. D. 309) 訳の『普曜経』〔以下 **普** と略す〕において、これらは各々別品となっているのである。即ち、**普** には、第1の部分 (八功德の一段) は「歎仏品第二十九」として、第2の部分 (10 偈の一段) は「嘱累品第三十」として組織されているのである。それ故、この二つの部分を合わせて嘱累の一品としている漢訳『方广大

莊嚴經』〔以下方と略す：唐の地婆訶羅 (A. D. 683) 訳〕及び梵本 **Lv** の構成組織は後代の処置になるものである。

このように、**Lv** の囑累品は元来異なる二つの部分の合成によるものであるが故に、それぞれの部分に関して別々に検討を加えることができる。本稿に於いては、我々は第2の部分、即ち「10 偈の一段」の、とりわけその10 偈についてのみ若干の検討を試みるであろう¹⁾。それは、この10 偈が全くそのままの形で梵文『十地經』[Daśabhūmikasūtra: 以下 **Dbh** と略す] にも見出されるという点で、我々の興味を一層強く引くからである。因に、**Lv** と **Dbh** はともにネパール仏教の「九法」のひとつとして尊崇されている経典である。

『十地經』の囑累品について

Dbh の終章、囑累品 (parindanāparivarta) には、それまでに述べられてきた「十の菩薩地」についての要約たる記述が多く記されており、それが囑累品の大部分を占めており、肝心の付囑の記述があらわれてくるのは、囑累品も殆ど終りに近くなってからである。この点、**Dbh** の囑累品は特異である。

ところで、『十地經』の囑累品について、我々は、その内容が現存梵本と漢蔵訳との間で大きな相違を示すことに注意しなければならない。即ち、梵本囑累品中に記される内容はその後半部において漢蔵訳と全く一致せず、漢蔵訳の原本となったものは現存梵本とは異なる原文を有していたものであることが明らかである²⁾。漢訳には六本がある³⁾が、そのいずれにおいても囑累が独立の一品とされてはならず、『十地經』には最初から囑累品があったわけではないことを示している。しかし、漢蔵訳と梵本との一致は、梵本囑累品の中途にまで及んでいる。これは、つまり、『十地經』にはもともと囑累品はなく、ただ「第十法雲地」に関する記述のあとに続けて「経典全体に関する要約」の記述があり、両者は分けられていなかったのであるが、やがて囑累品が別立されることによって、要約の部分は囑累品に組み入れられた。しかも、囑累品であるからには付囑の記述が必要であるので、それを含むところの囑累品にふさわしい内容が創作されねばならなかった。そういうわけで、囑累品はその後半において全く異なる記述を要することとなったのであろう。もっとも、漢蔵訳と梵本との不一致は、単に末尾の付囑に関する部分のみにとどまらず、囑累品中の偈の殆どを含む後半の大部分について見出されるのであるから、その形成過程は複雑であって、決して単純に付囑の問題としてのみ片付けるわけにはいかないかも知れない。しかし、少なくとも、

經典の形式上付囑の記述を必要であると感じたこと、それによって囑累品を構成したことが、その主要因であることはまちがいないであろう。そして、その付囑の記述を作成するに当たって、**Dbh** は **Lv** の囑累品を参考としたものではなからうか。その為に、両経は、それぞれの最後の詩頌において合致することとなったのではあるまいか。

「10 偈」の原文対照

Lv と **Dbh** とが共有するところの詩頌、即ち、両経の最後に位置する 10 偈について、我々はこれまでのところ同じ詩頌を他の經典に見出すことができないので、当面、この一致は **Lv** と **Dbh** との間にのみ存するものとする以外にはない。今、双方の原文を対照的に示せば、次の如くである。

Buddhist Sanskrit Texts No. 7

Daśabhūmikasūtra (ed. by P. L. Vaidya)
11. parindanāparivartaḥ (p. 109-110)

4) sattvā dṛṣṭā ye mayā buddhadṛṣṭyā
仏眼をもって私が見るところの衆生、
te 'rantaḥ syuḥ śāriputreṇa tulyāḥ /
彼等が舍利弗に等しき阿羅漢であって、
tām cetkaścītpūjayetkalpakotya
あたかもガンジス河の砂に等しき(数の)
tulyān gaṅgāvālukābhīryathaiva // 1

彼等を、もし誰かが億劫の間供養しようとも、
pratyekabuddhāya tu yaśca pūjām
ある者が、一昼夜でも、歓喜して、
kuryādahorātramapi prahrṣṭaḥ /

(一人の)独覚に対して、種々の花環や、
mālyaprakāraiśca tathāambaraiśca

K. tathāvaraiśca; Var. -āṃvara-

また衣服を捧げて、供養をなすならば、
tasmādayaṃ puṇyakṛto viśiṣṭaḥ // 2
前者よりも後者の方がすぐれた福德となる。

sarve 'pi pratyekajinā yadi syus-
たとえ、すべて(の衆生)が独覚となったとし

Buddhist Sanskrit Texts No. 1

Lalitavistara (ed. by P. L. Vaidya)
27. nigamaparivartaḥ (p. 318-320)

5) sattvā dṛṣṭā ye mayā buddhadṛṣṭyā
仏眼をもって私が見るところの衆生、
syuste 'rantaḥ śāriputreṇa tulyāḥ /
彼等が舍利弗に等しき阿羅漢であって、
tām cetkaścītpūjayetkalpakotī
あたかもガンジス河の砂に等しき(数の)
tulyām gaṅgāvālikābhīryathaiva // 1

L. -bhīryatha-

彼等を、もし誰かが億劫の間供養しようとも、
pratyekabuddhāya tu yaśca pūjām
ある者が、一昼夜でも、歓喜して、
kuryādahorātramapi prahrṣṭaḥ /

L. kuryād-

(一人の)独覚に対して、種々の花環や、
mālyaiḥ prakāraiśca tathāparaiśca

また、他のものを捧げて、供養をなすならば、
tasmādayaṃ puṇyakṛto viśiṣyate // 2
前者よりも後者の方がすぐれた福德となるであらう。

syuḥ sarvasattvā yadi pratyayairjinā
たとえ、すべての衆生が独覚となったとして、

て、

tân pūjayet kaścidihāpramattaḥ /
 彼等を、今誰かが懈怠なく、
 puṣpaiśca gandhaiśca vilepanaiśca
 諸々の花や香や塗油、また臥具や食物や
 kalpānānekān śayanānnapānaiḥ // 3

飲物を捧げて、無数の劫の間供養しようとも、
 ekasya yaścaiva tathāgatasya
 ある者が、たった一人の如来に対して、
 kuryāt praṇāmamapi caikavāram /
 一度でも敬礼をなして、しかも
 prasannacitto 'tha vadennamo 'rhan

K. thavadennamarhaṃ

浄心をもって「南無阿羅漢」と唱えるならば、

tasmādidam śreṣṭhātaram ca puṇyam // 4
 前者よりも後者の福德がいっそう勝れている。
 buddhā bhāve'yuryadi sarvasattvās-
 たとえ、一切衆生が仏陀となったとして、
 tâṃ pūjayet yaśca yathaiḥ pūrvam /
 ある者が彼等を、先と同様に、
 divyaiśca puṣpairatha mānuṣaiśca
 天界の花、あるいはまた、人界の多くの
 kalpānānekān bahubhiḥ prakāraiḥ // 5
 種類のものを捧げて、無数の劫の間供養し
 うとも、
 yaścaiva saddharmavilopakāle

ある者が、まさに正法の滅する時に、
 tyaktvā svakāyaṃ ca tathātmajīvam /

自分の身体と、また、自らの生命とを捨てて、
 dadyādahorātramidaṃ hi sūtram

L. var: dadyād-

一昼夜(でも)、この経を語る(√dā)ならば、
 viśiṣyate puṇyamidaṃ hi tasmāt // 6
 この福德は、かれ(前者)に勝るであろう。
 yasyepsitaṃ pūjayitum jinendrān

tâṃ pūjayetkaścidihāpramattaḥ /
 彼等を、今誰かが懈怠なく、
 puṣpaiśca gandhaiśca vilepanaiśca
 諸々の花や香や塗油を捧げ、
 kalpānānekāṃ⁶⁾ satataṃ hi tatparam // 3

L. var: chayānnapāraiḥ

常に専心して、無数の劫の間供養しようとも、
 ekasya yaścaiva tathāgatasya
 ある者が、たった一人の如来に対して、
 kuryātpṛaṇāmaṃ api caikaśo 'pi /
 一度でも敬礼をなして、しかも
 prasannācitto 'tha vadennamo 'rhatē

L. -nacitto

浄心をもって「南無阿羅漢」⁷⁾と唱えるなら
 ば、

tasmādidam śreṣṭhātaram ca puṇyam // 4
 前者よりも後者の福德がいっそう勝れている。
 buddhā bhāve'yuryadi sarvasattvā
 たとえ、一切衆生が仏陀となったとして、
 tâṃ pūjayedyāśca yathaiḥ pūrvam /
 ある者が彼等を、先と同様に、
 divyaiśca puṣpairatha mānuṣairvaiḥ
 天界の花、あるいは、人界の最上なる多くの
 kalpānānekāṃ bahubhiḥ prakāraiḥ // 5
 種類のものを捧げて、無数の劫の間供養し
 うとも、
 yaścaiva saddharmavilopakātle

L. -kāle

ある者が、まさに正法の滅する時に、
 tyaktvā svakāye ca tathaiḥ jīvitam /

L. -yam

自分の身体と、また、生命をも捨てて、
⁸⁾vadyādahorātramidaṃ hi sūtram

一昼夜(でも)⁹⁾、この経を説く(√vad)ならば、
 viśiṣyate puṇyamidaṃ hi tasmāt // 6
 この福德は、かれ(前者)に勝るであろう。
 yasyepsitaṃ pūjayitum vināyakāṃ

諸々の勝者主〔仏陀〕や、独覚や、
pratyekabudhânapi śrāvakāmśca /
声聞をも供養せんと欲するところの、
dṛḍham samutpādyā sa bodhicittam

その者は、堅固なる菩提心を起こして、
idaṃ sadā sūtravaram dadātu // 7
常に、この最上の経を語るがよい。
rājā hyayaṃ sarvasubhāṣitānām
これは、あらゆる善説中の王にして、
so 'bhyudgataḥ sarvatathāgatānām /
K. so tyudgataḥ

それは、一切如来の顕現である。
grhe sthitastasya tathāgataḥ sa
この経宝が存在するところの、
tiṣṭhedidaṃ yatra hi sūtraratanam // 8
K. niṣṭhed-; Var. ti-

その家には、その如来が住することになる)。その家には、常に如来が住する。
prabhāṃ sa prāpnoti śubhāmanantām

ここにおいて、(たったの)一句でも説かんと
するところの、

ekaṃ padam¹¹⁾ vādi śatihayaśca /
K. vādīśatiha yaśca

また、文字を失うことなく、意味を失うこと
もなく、

na vyañjanād grasyati nāpi cārthād

この経を他の者たちに語るところの、
dadāti yaḥ sūtramidaṃ parebhyah // 9

その者は、無限の清浄なる光明を得る。

anuttarāsau naranāyakānām
K. anuttaro sau

この法を聞いて奉行するところの、
sattvo na kaścīt sadṛśo 'sya vidyate /
その者は、人民の導師中の最上にして、
bhavetsamudreṇa samaśca so 'kṣayaḥ

諸々の導師〔如来〕や、独覚や、
pratyekabuddhāmśca tathaiṣa śrāvakām /
また、声聞を供養せんと欲するところの、
dṛḍham samutpādyā sa bodhicitta

L. -am

その者は、堅固なる菩提心を起こして、
idaṃ sadā sūtravaram dadhātu // 7
常に、この最上の経を保持せよ。
rājā hyayaṃ sarvasubhāṣitānām
これは、あらゆる善説中の王にして、
yo 'bhyudgataḥ sarvatathāgatānām /

一切如来の顕現たるものなり。
grhe sthitastasya tathāgataḥ sadā
この経宝が存在するところの、
tiṣṭhedidaṃ yatra hi sūtraratanam // 8

¹⁰⁾pratibhāṃ sa prāpnoti śubhāmanantām
L. var: -bhāsamāpno-

億劫の間、(たったの)一句でも読誦し、

ekaṃ padam vakṣyati kalpakoṭi /

na vyañjanā bhraṣyati nāpi cārthā

L. var: -nādbhrasya- L. var: -thādda-

この経を他の者たちに語るところの
dadyacca yaḥ sūtramidaṃ parebhyah // 9

L. -am

その者は、無限の清浄なる光明(弁才?)を得
る。

anuttaro 'sau naranāyakānām

この法を聞いて奉行するところの、
sattvo na kaścīt sadṛśo 'sya vidyate /
その者は、人民の導師中の最上にして、
bhavetsamudreṇa samaśca so 'kṣayaḥ

彼に等しき衆生は存在せず, 彼に等しき衆生は存在せず,
 śrutvā hi yo dharmamimam praradyate // śrutvā hi yo dharmamimam prapadyate //
 K. -idaṃ 10 L. var: -idaṃ 10
 彼は大海の如く無尽なるものとなるであろう。彼は大海の如く無尽なるものとなるであろう。

双方の原文は全同というわけではない。相違点のすべてを列挙すればむしろ煩瑣であると言うべきであろう。それにもかかわらず、これら双方の一致は明白である。今、両原文を比較して、その注目すべき相違点のいくつかを指摘する。

第2偈: tathāmbaraīśca ↔ tathāparaīśca

第3偈: pratyekajinā ↔ pratyayairjinā; śayanānnapānaiḥ ↔ satataṃ hi tatparam

第4偈: caikavāram ↔ caikaśo 'pi

第6偈: dadyād ↔ vadyād

第7偈: jinendrān ↔ vināyakāṃ; dadātu ↔ dadhātu

第9偈: prabhāṃ ↔ pratibhāṃ; vādi śatihayaśca ↔ vakṣytai kalpakoṭī; grasyati
 ↔ bhraśyati

これらの相違のいくつかは写本の不明瞭さに起因すると考えられる。また、双方を対照することによって意味が明瞭になる部分もある。特に、**Lv** には西蔵訳¹²⁾があるので、これが重要な参考となる。これに対して、**Dbh** は、先に指摘したように、この部分を含むところの囑累品の後半部が全く漢蔵訳と異なるものとなっているため、囑累品後半部に関する限り漢蔵訳を参考とすることができないのである。したがって、最後のわずかに 10 偈のみではあるが、これと同一の偈が **Lv** に見出されることは、訳出上極めて有利である。**Lv** には漢訳二本と蔵訳とがあり、いずれもこの部分を含んでいるからである。

結び

さて、我々は先に **Dbh** が **Lv** を模倣したものではないかという推測をかけたが、それは主に、**Lv** においては漢蔵訳ともにこの 10 偈を含んでいるので、かなり古くからあったものであると思われるのに対し、**Dbh** の場合は、六本の漢訳及び蔵訳のいずれにもこれが含まれていないので、よほど後代になってからこの部分が付加されたものにちがいないと思われるからである。

しかし、実は、**Lv** の囑累品についても、これが付加的部分であることが予測される。何故なら、**Lv** は仏伝經典であるから、その素材は原始仏教以来のものを承け継いでいるが、それに更に大乘的な内容や形式を付け加えることによって、

大乘仏伝たるものとなっているのである。その大乘的な形式のひとつとして囑累品があり、**Lv** は他の大乘經典に倣って囑累品を設けることによって大乘的特色を発揮していると言うことができる。つまり、**Lv** の囑累品は大乘經典における經典構成形式上のある程度の発展を承けて、作成付加されたものと思われるのである。それ故、**Lv** に見られる問題の偈についても、これが **Lv** 自身の創作になるものではなく、他經のものを借用した可能性は残されているとしなければならぬ。したがって、**Lv・Dbh** ともに他の何らかの經典からこれを借用したのかも知れない。

しかし、他經に同じ偈を見出し得ない現段階においては、我々はこれを **Lv** と **Dbh** との間にのみ見られる一致として考える以外にはないし、かく見る時には、やはり **Lv** のものが原形で **Dbh** がそれを借用したと見るのが自然であろうと思うのである。

- 1) この一段に関しては別の機会にあらためてより詳細な検討を試みる予定である。又、この10偈の直前に記される散文部に関しても **Lv** と **Dbh** との間に幾分の対応が見出されるので、これをも含めた全体的な考察が必要であるが、ここでは紙数制限の関係上「10偈」の対応のみを問題とする。
- 2) この点については『大乘仏典 8 十地經』(荒牧典俊訳、中央公論社) p. 393 の註(93)、及び解説(p. 404 以下)参照。
- 3) 『十地經』の漢訳六種とは、漸備一切智徳經(A.D. 297, 竺法護); 十住經(A.D. 402-12, 鳩摩羅什); 六十華嚴經十地品(A.D. 418-20, 仏駄跋陀羅); 十地經論〔所引經文〕(A.D. 508-11, 菩提流支等); 八十華嚴經十地品(A.D. 695-9, 実叉難陀); 十地經(A.D. 774, 尸羅達磨)の六本である。
- 4) **Dbh** の原文については、R. Kondo: *Daśabhūmiśvaro nāma Mahāyānasūtram* (Tokyo, 1936)をも参照し、特に注意すべき相違についてのみ、それをK.の略号をもって示した。又、Var.の略号で示したものは、K.の脚注に示されているVariantから拾ったものである。
- 5) **Lv** の原文については、S. Lefmann: *Lalita Vistara I* (Halle, 1902)をも参照し、注意すべき相違をL.の略号をもって示した。又、同じくS. Lefmann: *Lalita Vistara II* (Halle, 1908)に掲げられたVariantenを参照し、注意すべき点をL. var.: の略号で示した。
- 6) *satatam hi tatparam* は藏訳(大谷大学監修『北京版西藏大藏經』No. 763)と合致せず。藏訳(*zas dañ skom dañ bgo-ba dañ*)は「食物と飲料と衣服と」と訳し得るので、この部分がむしろ**Dbh**に近い原文であったことを知り得る。
- 7) 普、方ともに「南無仏」と訳している。
- 8) F. Edgerton: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar*, 29.44 (p. 145) 参照。
- 9) *ahorātram* は藏訳(*shag gcig bar du*)によれば「一日の間」の意。普には「日常昼夜」とある。
- 10) *pratibhā* は、あるいは *pratibhāna* (弁才)と同義か。藏訳には *spobs-pa* (*prati-bhāna*)と訳され、普にも「其大弁才無等倫」とある。
- 11) *vādi śātiḥayaśca* はK.に従い、*vādiśati-īha-yaś-ca* と見るべし。
- 12) 藏訳は梵語原文の忠実な訳であるが、それは九世紀にできたものである。中野義照訳『ヴィンデルニッツ 仏教文献』p. 194 参照。 (鹿児島経済大学助教授)